

【原 著】

学生との協働によるスクールボランティア推進支援に関する
実践的考察

佐藤 大介 山根 文男 江木 英二 曾田 佳代子
近藤 弘行 後藤 大輔

A Practical Study on School Volunteer Promotion Supports in cooperation with Student Staffs

Daisuke SATOH, Fumio YAMANE, Eiji EGI, Kayoko SODA, Hiroyuki KONDOH,
Daisuke GOTOH

2016

岡山大学教師教育開発センター紀要 第6号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.6, March 2016

原 著

学生との協働によるスクールボランティア推進支援に関する実践的考察

佐藤 大介^{*1} 山根 文男^{*2} 江木 英二^{*2} 曾田 佳代子^{*2} 近藤 弘行^{*2} 後藤 大輔^{*2}

2013年10月よりスクールボランティアビューローに「学生スタッフ制度」を新たに設け、活動開始後2年が経過した。その間、学生スタッフと大学教職員が協働し、スクールボランティアフェアの開催、スクールボランティア活動事例集の作成・編集・発行と各教育委員会等への配布、スクールボランティアツアーの実施等様々な学生目線のスクールボランティア推進支援事業に取り組んできた。それぞれの事業では、学生スタッフが学生らしい工夫を随所に凝らしており、企画・準備から実施・反省に至るまで多大な尽力・努力をした。これらの活動を通して、スクールボランティア活動に参加しようと思っている学生やなかなか一歩が踏み出せない学生に対する啓発活動として大変効果的な事業であったことは成果と言えるが、学生の参加減少や学生への周知の難しさ、また、学生スタッフのなり手不足や大学教職員からの学生への働きかけの重要性など課題も残っている。

キーワード：学生スタッフ制度、スクールボランティアフェア、スクールボランティア活動事例集、
スクールボランティアツアー

※1 岡山大学 地域総合研究センター

※2 岡山大学 教師教育開発センター

I はじめに

岡山大学教師教育開発センターには学校支援ボランティアや学習支援ボランティア等の窓口機能を果たす「スクールボランティアビューロー」があり、2013年10月に新たに「学生スタッフ制度」を設けた。本制度については佐藤ら(2015)で概観し、活動としてスクールボランティアフェアの開催について紹介している。その後制度開始より2年が経過しようとしている。その間、学生スタッフが中心となり、スクールボランティアフェアの他にも、スクールボランティア活動事例集の原稿作成・編集・発行および各教育委員会等への配布、スクールボランティアツアーの企画・実施等、大学生が積極的にスクールボランティア活動に取り組むことができる、または取り組みやすくなるような環境作りに取り組んできた。

こうしたスクールボランティア推進のための多大な貢献を果たしてくれている学生スタッフ制度であるが、課題も明らかとなってきている。

そこで、本論では、学生スタッフと大学教職員の協働によるスクールボランティア推進支援の内容について報告すると共に、その成果と課題について考察する。

II 学生スタッフによるスクールボランティア推進支援活動

1 岡山大学スクールボランティアフェア

スクールボランティアフェアは、2014年4月5日(土)13:30~17:30に「岡山大学スクールボランティアフェア2014」(以下、「SVF2014」という。)を、2015年4月29日(水・祝)12:30~17:00に「岡山大学スクールボランティアフェア2015」(以下、「SVF2015」という。)(※1)をそれぞれ岡山大学創立五十周年記念館で開催した。フェアの開催主旨は、岡山県内の大学・短期大学・専門学校の学生が、地域の学校園や社会教育施設等において、教育支援に関わるボランティア活動に積極的に取り組むことができるよう、学生と各ブース出展者との直接交流・対話が可能となる場を提供することを目的としている。そのため、教育委員会や学校、社会教育施設等の担当者へ参加の呼びかけを行った。また、フェアの対象者について、SVF2014は岡山大学の学生に限定していたが、SVF2015は他大学の学生も広く受け入れ・広報を行い、参加対象者の拡大を図った。フェアでは学生スタッフが毎年様々な内容を企画し実施している。

(1) 岡山大学スクールボランティアフェア2014

SVF2014は、「開会・全体オリエンテーション」、「オクラホマミキサートークセッション」、「教育委員会PRタイム」を企画した。

全体オリエンテーションでは、本イベントの趣旨や出展ブースの回り方について説明を学生スタッフが行った。

「オクラホマミキサートークセッション」(写真1)では、フォークダンスのように内円と外円を参加者で作り、音楽が鳴っている間外円の学生は時計回りに移動し、音楽が止まったところで正面にいる学生とトークテーマに合わせて交流をするものである。学生スタッフはトークテーマを何度も議論を重ねながら準備をし、ボランティア活動の経験者であれば経験を通じて語るることができる話題を、未経験者であればこれから始めるにあたっての期待や不安などをそれぞれの立場で意見交換ができるように工夫した。また、ブース出展者にも活動の紹介をこのトークセッションで行い、その後ブースまで学生に来てもらう紹介の場として参加してもらった。「教育委員会PRタイム」では、出展ブース代表者がパソコンのスライドや配布資料など一切使用せず、マイク一本で90秒間活動の紹介・PRをしてもらった。ブースとしては、以下の12件の出展があった。

- 01「教師への道」インターンシップ事業(岡山県教育庁高校教育課)
- 02学習支援ボランティア(岡山県教育庁生涯学習課)
- 03学生ボランティア養成講座(岡山県生涯学習センター)
- 04野外体験ボランティア 閑谷グリーンズ(岡山県青少年教育センター閑谷学校)
- 05岡山市学校支援ボランティア(岡山市教育委員会)
- 06学校支援ボランティア(岡山市立岡山中央中学校)
- 07学校支援ボランティア(岡山市立岡北中学校)
- 08倉敷市学校支援ボランティア(倉敷市教育委員会)
- 09総社市学校支援ボランティア(総社市教育委員会)
- 10瀬戸内市学習支援ボランティア(瀬戸内市教育委員会)
- 11赤磐市学習支援ボランティア(赤磐市教育委員会)
- 12早島町教育支援ボランティア(早島町教育委員会)

(2) 岡山大学スクールボランティアフェア2015

SVF2015の企画としては、「学生スタッフ企画『PRタイム争奪!エンパシークイズ』」のみ行った。企

画を1つにした理由として、より多くのブースを参加した学生に回ってもらうことを重視したいという学生スタッフの思いがあったからである。そのため、



写真1 オクラホマミキサートークセッションの様子



写真2 エンパシークイズの様子

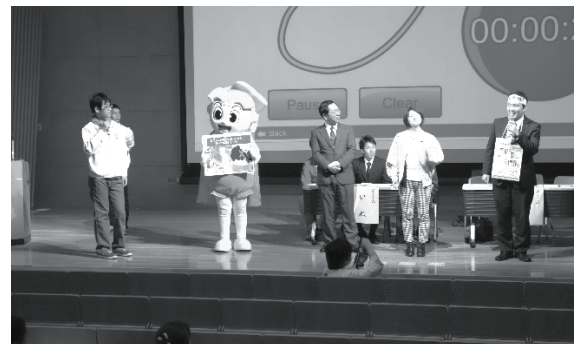


写真3 ブース出展者PRタイムの様子



写真4 出展ブースの様子

集合形式のイベントではない「スタンプラリークエスト (SQR)」や「SQR 攻略ボード」といった企画をし、参加した学生がひとつでも多くのブースを回って活動の紹介・説明を聞いてもらえるよう工夫した。

「学生スタッフ企画『PR タイム争奪！エンパシークイズ』」(写真2)もねらいは同様である。どのブースを訪問するか迷っている参加学生のために、ブース出展者が学生スタッフの出題する二択クイズに挑戦し正解すればポイント獲得となり、その結果に応じて、ステージ上でのブース紹介・PRを行う時間が1ブースあたり15～60秒まで与えられるという競争型クイズゲームである。また、クイズ自体に正解はなく、選択肢に該当する場合に会場にいる参加者が拍手をし、その音の大きさを進行役である学生スタッフが判断し正解となる。クイズの内容もスクールボランティアに関連したものとなっており、例えば、「交通費が支給されなくてもボランティアに参加するか」や「ボランティア活動をするなら長期(半年以上)か、または短期(半年以下)か」などといった、ブース出展者にとっても紹介や説明時、さらには活動内容を考えていく上で参考としてもらえるような出題となるよう、学生スタッフは工夫をした。ブース担当者によるPRタイム(写真3)は、SVF2014でも実施したが、参加した学生へのアンケート結果から、出展しているブースに関心を持ったと回答したものが、「そう思う」「少しそう思う」を合わせると87%を占めており、また、「教育委員会・学校園の先生方を身近に感じたか」の質問については、89%が「そう思う」「少しそう思う」と回答していることから、参加している学生にとってブースで話を聞こうとする意欲につながるものであると考えられるため、継続して実施した。時間については出展ブース数が増加したため、統一的に90秒とせず先に述べたクイズゲームの勝敗によって時間を決める形とした。

ブースとしては、以下の22件の出展があり、SVF2014と比較すると増加した。

- 01 国立吉備青少年自然の家法人ボランティア(吉備ウーリーズ)(国立吉備青少年自然の家)
- 02 安全・安心教室(岡山県県民生活部くらし安全安心課)
- 03 防犯ボランティア(ももパト隊・岡山ガーディアンズ)(岡山県警察)

- 04 「教師への道」インターンシップ(岡山県教育庁高校教育課)
- 05 児童生徒の学習支援ボランティア(岡山県教育庁生涯学習課)
- 06 ばるボランティア(岡山県生涯学習センター)
- 07 施設ボランティア「グリーンズ」(岡山県青少年教育センター閑谷学校)
- 08 渋川マリンズ(岡山県渋川青年の家)
- 09 岡山市放課後子ども教室(岡山市放課後子ども教室)
- 10 岡山市学校支援ボランティア(岡山市教育委員会)
- 11 学校支援ボランティア(岡山市立岡山中央中学校)
- 12 学校支援ボランティア(岡山市立岡北中学校)
- 13 岡山市立妹尾中学校土曜受験対策勉強会(岡山市立妹尾中学校)
- 14 学校支援ボランティア(岡山市立御津小学校)
- 15 自然体験ボランティア(岡山市立少年自然の家)
- 16 マッチングまでやります！倉敷市学校園支援ボランティア事業(倉敷市教育委員会学校教育部)
- 17 雪舟スクールサポーター(総社市教育委員会)
- 18 瀬戸内市学習支援ボランティア(瀬戸内市教育委員会)
- 19 赤磐市教育委員会(赤磐市教育委員会)
- 20 あさくち子ども応援ボランティア(浅口市教育委員会)
- 21 はやしま学支援本部(早島町)(早島町教育委員会)
- 22 放課後学習支援ボランティア(就実中学校)※資料配布のみ

多くのブースを学生が回りやすくするために、ブースの配置も動線を考えた配置とした(写真4)。また、スタンプを一定数集めることによって、後述する冊子「スクールボランティア活動事例集『スクールボランティアナレッジ』」と引き換えることができる「スタンプラリークエスト」というスタンプラリーを学生が考案し、図1のスタンプラリー用紙を制作してくれた。また、スタンプラリーを楽しんでもらえるよう、学生スタッフがデザインした模造紙(SQR 攻略ボード)を会場の壁に貼り付け、ブースの魅力等を参加者が自由に書き込み、他の参加者はブースを回る際の口コミ交流場として利用した。

表1 スクールボランティアフェアブース出展数および参加人数

学 生			大学教職員	出展		取材・ その他	総参加人数
岡山大学	他大学	所属不明		ブース数	参加者数		
101 (132)	5 (0)	11 (10)	13 (12)	22 (12)	55 (28)	7 (0)	192 (182)

※数字はSVF2015。括弧内の数字はSVF2014。

(3) 成果と今後の課題 (※2)

2回のフェアを開催し、成果と課題がそれぞれ明らかとなった。

①学生に対する成果

- ・学生目線にたったスクールボランティア推進のための企画・運営となった。
- ・参加した学生のスクールボランティアに対する意欲向上につながった。また、これまで学生が知らなかった活動に対しても興味・関心を示すようになった。
- ・学生にとって各ボランティア窓口担当者を身近に感じるようになった。

②学生ボランティアを求める教育関係者（ブース出展者）に対する成果

- ・出展者は日頃大学生と関わる機会が少ないが、イベント(オクラホマミキサートークセッション等)を通して多くの大学生との交流を図ることで、学生の考えなどを知ることができた。
- ・ブース出展数および参加人数の内訳が表1、表2に示すとおりである。表1のとおり、出展ブース数は1年間で12件から22件に増加した。その理由として、スクールボランティアフェアの開催について、スクールボランティアビューローに依頼や相談があった場合に地道に紹介・説明をしていた点や、1回目比べて2回目は出展者への説明も円滑に実施することができ、また調整などもスムーズに進めることができたという主催者側の理由が挙げられる。また、出展側は学生に対して直接説明できるという点に大きな魅力を感じており、ボランティア活動への登録までは至らなくても、学生に活動を知ってもらえるチャンスと考えている場合もあった。

③大学における成果

- ・学生はボランティア活動を始めるきっかけを必要としていることがわかった。
- ・学生スタッフとの協働によって新たな進め方を見出すことができた。
- ・学校園にとって学生と対話の機会を提供することが重要であることを再認識することができた。

しかし、一方で課題も明確となってきた。

①趣旨・目的に対する課題

- ・学生と学校園のマッチング率向上にまで十分に機能しているとは言えず改善する必要がある。

②運営方法に対する課題

- ・部局単位での運営ではなく、全学的に運営に参画してもらい、実行委員会形式での実施を検討する必要がある。
- ・教員の積極的な参加を促すことも必要である。
- ・イベント中に他大学を含む学内外の教職員間での意見交換を行う場を設ける。

③周知・日程に対する課題

- ・表2を見ると、SVF2015に前年度と比較すると参加学生数が減少していることが分かる。SVF2014は4月5日ということもあり、学生には前年度後期末(1月下旬)より広報をしていたが、SVF2015は4月29日開催の行事を4月に入ってから学生に周知していた。これでは周知としては遅かった。
- ・参加人数が顕著に減少しているのが、教育学部生である。周知の不十分なども原因と考えられるが、平成26年度入学生が両年度共に少ない傾向にあることは、スクールボランティア推進支援において課題として認識しておく必要がある。
- ・周知方法(E-mail送信, 掲示, ホームページ掲載等)についても今後の課題である。
- ・4月のオリエンテーション等でちらしを配布され

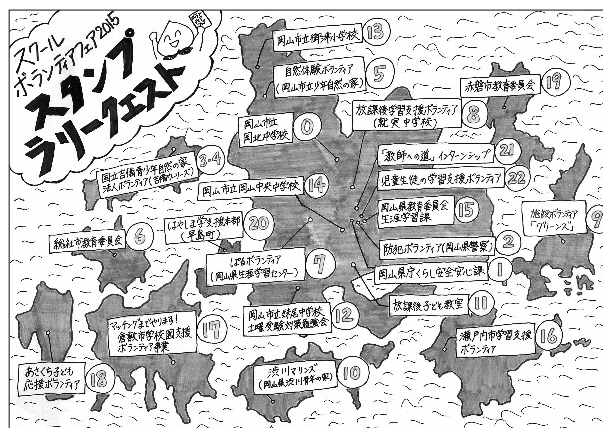


図1 スタンプラリー用紙

表2 スクールボランティアフェアにおける岡山大学学生の参加人数内訳

学年	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	工学部	環境理工部	農学部	MPコース	大学院教育学研究科	総計
学部1年	5(3)	19(4)	1(0)	1(0)	1(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)		28(8)
学部2年	3(0)	2(15)	0(0)	0(0)	1(0)	0(1)	0(2)	0(0)	0(0)		6(18)
学部3年	1(1)	18(38)	0(0)	0(0)	4(3)	0(0)	2(1)	1(1)	0(2)		26(46)
学部4年	4(7)	16(44)	0(0)	0(0)	4(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		24(53)
修士1年										15(2)	15(2)
修士2年										2(5)	2(5)
総計	13(11)	55(101)	1(0)	1(0)	10(5)	1(2)	2(3)	1(1)	0(2)	17(7)	101(132)

※数字はSVF2015。括弧内の数字はSVF2014。

表3 スクールボランティア合同説明会における参加人数内訳

学年	文学部	教育学部	農学部	総計
学部1年	0	5	0	5
学部2年	0	7	0	7
学部3年	1	24	1	26
学部4年	0	0	0	0
総計	1	36	1	38

たとしても、当日の配布資料が多いことから埋もれてしまい、学生の目に止まっていない場合が多い。一言でも教員等からの説明が必要である。

④受付・会場誘導

- ・誘導方法における工夫が必要である。例えば、建物内に会場図を貼る等の方法が考えられる。
- ・学生スタッフの企画とは別に、岡山市教育委員会による登録時研修会をフェアに合わせ実施していただいたが、研修会のみに参加する学生の多くはブースに行かずたむろしている姿が目立ち、会場の雰囲気として好ましいものではなかった。研修会の実施時間帯の設定やたむろさせないための方法を考える必要がある。

(4) スクールボランティア合同説明会

前項で課題に挙げた「実行委員会形式での実施を検討」については、2015年9月9日に第1回スクールボランティアフェア2016実行委員会を開催した。実行委員会では、開催趣旨の検討や2016年度の開催日時の候補および決定、また広報計画として、1月末には学生への周知を始めること、教員の参加を促していくことなどを確認した。その中で、フェアを春季に年1回開催するだけでなく、教育学部の3年次主免許教育実習が終了する冬季の開催も視野に入れてはどうかとの提案があり、試行的にフェアのような規模ではなく、縮小版として合同説明会と称し、学生募集に関心のある団体等に協力を仰ぎブース出展のみという形で平成27年12月9日(水)16:

00~17:00に岡山大学教育学部本館の会議室で実施した。ブースとしては、岡山県県民生活部くらし安全安心課、岡山県青少年教育センター閑谷学校、岡山市教育委員会、岡山市岡山っ子育成局、赤磐市教育委員会、早島町教育委員会の7団体11名の方に出展していただき、学生の参加者数については表3に示すとおりであった。同日16時まで教職履修者向けの教職ガイダンスが開催されており、教職ガイダンスでは、学生スタッフによる説明会の案内に加え、教職ガイダンス担当の大学教員からも紹介してもらった。1時間という短時間での開催ではあったものの、参加者アンケートの結果から、学生1人当たり3.3ブースを回って説明を聞いていることが分かった。しかしながら、水曜日の夕刻は教職課程の授業科目が時間割設定されている時間帯であるため、より多くの学生が参加しやすい日時を検討する必要があるが、アンケート結果からも学生の満足度は高く、冬季のフェア簡易版の開催ニーズはあるように考えられる。

2 スクールボランティア活動事例集「スクールボランティアナレッジ」の発行および教育委員会等への配布

(1) 岡山大学地域総合研究センター「学都チャレンジ学生企画」への応募

岡山大学地域総合研究センターでは、まちなかキャンパス事業の一環として「学都チャレンジ企画」事業を行っている。この事業では、学生や教職員が

まちづくりに積極的に参加できるよう、大学と地域をつなぐ取り組みに関する企画について募集を行っており、審査を通過した企画については必要な経費や活動の支援を行っている。そこで、学生スタッフが中心となり、平成26年度学都チャレンジ学生企画への申請を6月に行い、「スクールボランティア事例集の作成」を目指した。この事例集作成および配布で期待される効果としては、地域の教育力向上、教育委員会および大学が必要とするスクールボランティア内容の調査、これからスクールボランティアを始める学生の不安解消の3点を挙げた。審査の結果採択され、経費支援を受けることとなった。

スクールボランティア事例集では、ボランティア活動に興味はあるがまだ参加したことがない学生を主としているが、各教育委員会での登録手続きは終わっているもののまだ活動を開始していない学生や、すでに活動をしている・したことがあるが異なるスクールボランティア活動にも取り組みたいと思っている学生など、スクールボランティアに取り組むすべての学生を対象とした冊子とすることを目指した。そこで、内容は、受け入れ側の学校現場の声や実際に活動をしている学生ボランティアの感想、教育委員会による手続きの説明など、スクールボランティアに関わる多くの関係者に協力を依頼し、実際に学生スタッフが直接インタビュー（取材）に伺い、話を聞きまとめていった。そのため、個別のインタビューによって話題や内容が様々であった。

インタビューを行う前段の準備として、学生スタッフは協議を重ね、次のとおり共通の質問事項をあらかじめ用意した。

■教育委員会への質問事項

- ①ボランティア開始の流れ（登録方法やボランティア先が決まるまでの経緯など）
- ②学生ボランティアを学校園に受け入れた背景または理由
- ③各地域の教育の特色、独自の活動は何か。また、それに学生はどう関わることができるのか。
- ④学生はこれからどのような教員になってほしいか。

■学校園への質問事項

- ①学生ボランティアが学校や園児・児童・生徒に与える影響や効果
- ②学校園にとって、ボランティアとして活動している学生はどんな存在か。

- ③学生にしてほしい活動や期間はどうか。
- ④どのような学生を求めているのか。
- ⑤学校園ではどの先生が学生ボランティアの対応・担当してくれるのか。受け入れ窓口担当はどの先生に連絡すればよいのか。

■学生ボランティアへの質問事項

- ①ボランティアで学んだこと、得たこと。
- ②一日のタイムスケジュール（服装、持ち物、ボランティアの頻度など）
- ③ボランティアを始めた理由やいつ頃から始めたのか。
- ④ボランティアをして良かったこと。
- ⑤スクールボランティア未経験者へのメッセージ
- ⑥教育実習とボランティア活動の違い（該当者のみ）

また、インタビューの実施前には、筆者らをインタビュー役と見立て、アポイントメントから実際の研究室（学校）訪問、模擬問答などを行い、マナーや想定される回答へのさらなる質問などについての事前練習を行った。

事例集作成にあたっては、7区市町教育委員会、16学校園、8名の活動経験学生ボランティアに協力を依頼し、事例掲載したのは以下の通りである。

- ・岡山県立西大寺高等学校
- ・岡山県立早島特別支援学校
- ・岡山県立西大寺高等学校インターンシップ学生
- ・岡山県立早島特別支援学校 学生ボランティア
- ・岡山県教育委員会
- ・岡山市立石井中学校
- ・岡山市立光南台中学校
- ・岡山市立津島小学校
- ・岡山市立角山小学校
- ・岡山市立石井中学校 学生ボランティア学生
- ・岡山市教育委員会
- ・倉敷市立倉敷第一中学校
- ・倉敷市立豊洲小学校
- ・倉敷市立茶屋町小学校
- ・倉敷市立茶屋町小学校 学生ボランティア
- ・倉敷市教育委員会
- ・総社市立清音幼稚園
- ・総社市教育委員会
- ・瀬戸内市立牛窓中学校
- ・瀬戸内市立裳掛小学校

- ・瀬戸内市立裳掛小学校 学生ボランティア
- ・瀬戸内市教育委員会
- ・赤磐市立高陽中学校
- ・赤磐市立山陽西小学校
- ・赤磐市立高陽中学校 学生ボランティア
- ・赤磐市立山陽西小学校 学生ボランティア
- ・赤磐市教育委員会
- ・早島町立早島中学校
- ・早島町立早島幼稚園
- ・土曜はやしま塾 学生ボランティア
- ・早島町教育委員会

自治体ごとに担当する学生スタッフを決定し、2014年8月～11月にインタビューを行った（写真5）。その後、2015年3月まで記事の作成・校了、編集作業を行い、2015年4月1日に名称を「スクールボランティア活動事例集『スクールボランティアナレッジ～先生になりたい人のための、知っておきたいボランティア～』」（図2）とし、1,000部発行した。その後、学生だけではなく、スクールボランティアの取組について知ってもらえるよう、協力し



写真5 インタビューの様子

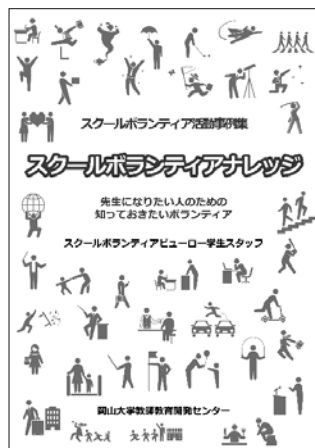


図2 スクールボランティア活動事例集表紙

てくださった教育委員会や学校園等へも配布した。

インタビュー後も学生スタッフは打合せを重ね、この冊子の活用診断ができるフローチャートを独自に作成したり、文語調ではなく口語調で文体を統一したり、また自治体ごとに担当学生スタッフから読者となる学生に語り掛けるようなまとめをしたり、ボランティア活動に行くまでのバスや電車等での移動時間に読むことができるよう、冊子をA5判にするなど、細部まで学生目線にこだわって作成された冊子であると言える。

（2）成果と課題

まず、事例集作成を通して、学生スタッフ自身のチームワーク力や責任感、コミュニケーション力といった能力を醸成することができたと考えられる。また、後述するスクールボランティアツアーは、この事例収集時にインタビューに答えてくださった先生の学生ボランティア募集に対する熱意に心動かされ、何とか期待に応えたいという学生スタッフの想いが発端である。それゆえ、学生スタッフにとって大変大きな刺激となり、次の行動へとつなげるきっかけとなっており、主体的行動力も身に付けられたのではないかと考えられる。

事例集の配布は、全学教職オリエンテーションや教職課程必修科目、SVF2015等主としてこれからボランティア活動に取り組もうとする学生に配布を行った。また、スクールボランティア活動についての理解を促進し学生に取り組むよう推薦してもらったり、学生スタッフの取り組みを知ってもらうことを目的として、学内教職員や関係教育委員会、また本学に視察で来られた学外の方にも配布した。実際に配布したことによってどの程度読んでもらい、スクールボランティア推進に寄与しているかについては検証できていないが、それでもこの事例集が学生にとってスクールボランティアを始めたいという気持ちや、何から始めていいのかわからないといった不安に対して、活動までの道しるべを示してくれる資料となりえることに間違いないと実感している。事例収集においても、学生目線でのインタビューが行われたことにより、学生にとってより身近な、そして分かりやすい冊子となった。

課題としては、本事業は学都チャレンジ学生企画の一環として行ったものであり、毎年発行する必要はないかもしれないが、継続して作成・発行するには経費が必要となることである。少なくとも本冊子

の内容については自由に閲覧できるようにホームページ上での配布も検討する必要がある（現時点では冊子講読を推奨しているためウェブでは公開していない）。

また、活用方法についても十分に検討する必要がある。配布して終わる形では、本来の本冊子のねらいを果たすことはできていないかもしれない。より一層スクールボランティア推進を図るためにも、学生に配布後の活用についても、例えば、授業やガイダンス等で活用するなどし、学生がこの事例集の価値と意味について理解を深めてもらう機会を設ける必要もあると考えている。

3 スクールボランティアツアーの開催

(1) スクールボランティアツアーのきっかけ

先述の通り、スクールボランティアツアーのきっかけは、学生スタッフが活動事例集作成のため早島町教育委員会へインタビューに行った時のことである。その日学生スタッフ2名は早島町教育委員会だけでなく、町内の2学校園もインタビュー予定としていたが、委員会職員が駅からの送迎の支援をしてくださったのである。インタビューでも車中でも委員会職員の優しさや温かみにふれていく中で、「土曜はやしま塾」での学生ボランティア募集の説明を受けた際、「自分たちで土曜はやしま塾へ学生ボランティアを派遣できないだろうか」と考え、スクールボランティアビューローに相談があったのである。それを発端に、スクールボランティアツアーの企画に至った。この企画は、学生スタッフ制度を目指していた、「学校園等における支援内容現地調査」および「学校園と連携したボランティア活動入門の実施」という理念に適っており、すぐに実施に向けて学生スタッフはツアーを計画した。

ツアーの目的は、まだスクールボランティアに参加したことがない学生や参加はしたいがなかなか一歩が踏み出せない学生のために、学生スタッフが事前にボランティア活動の内容を体験・調査し、その活動にバス等で学生スタッフと一緒に同行し、活動を始めるきっかけを提供するものである。そのため、ツアー開催にあたっては、学生スタッフが訪問先の担当者と連絡・調整を行い企画し、教職員も参加する形で実施した。

(2) ツアーの実施概要

①第1回早島ボランティアバスツアー

日時：2014年10月18日（土）8：30～13：00

訪問先：土曜はやしま塾

参加人数：7名（学生：6名，教員：1名）

②第2回早島ボランティアバスツアー

日時：2014年10月25日（土）8：30～13：00

訪問先：土曜はやしま塾

参加人数：17名（学生：13名，教職員：4名）

③岡山市立光南台中学校貝殻山登山ボランティア

日時：2015年3月23日（月）6：50～16：00

訪問先：中学生の貝殻山登山引率支援

参加人数：3名（学生：3名）

④「そうだ、早島へ行こう」子どものやる気応援ツアー

日時：2015年7月4日（土）7：30～15：30

訪問先：土曜はやしま塾

参加人数：14名（学生：13名，教員：1名）

⑤「いっせ～のお～でっ中学生の夢応援」ツアー

日時：2015年12月5日（土）7：45～15：20

訪問先：岡山市立妹尾中学校高校受験対策勉強会

参加人数：7名（学生：5名，教職員：2名）

(3) 成果と課題

ツアーは5回開催した。参加する学生は所属学部も様々であり、教職を履修していない学生の参加もあることから、学生にとってこのツアーという企画の意義は大きいものであることが伺える。また、土曜はやしま塾や高校受験対策勉強会は学生ボランティアに継続しての参加の希望を募っていたが、ツアーを通して活動内容に理解を示し、興味・関心を持った学生はそのまま学生ボランティアとして登録し継続参加するなど、ツアーに協力してくださった訪問先にとってもボランティア募集の効果があり、Win-Winの関係にある企画と言える。

ただし、課題として挙げられるのが、こうしたツアーの訪問先の選定である。今回のツアーについては、学生スタッフが事例集作成のためのインタビューでの出会いをきっかけとしていたり、また、スクールボランティアビューローへの学生ボランティア派遣要請があった学校等にツアー企画を打診し、実施した。まだ手探り状態で訪問先を決定しているが、学生スタッフも未経験の場所に対して学生を引率することに不安を感じており、学生スタッフにとっても負担としては大きいようである。そのため、今後どのように訪問先を選定していくか検討していく必要がある。

さらに、参加する学生募集の難しさも課題となっている。ちらし作成後に広報を行ってもなかなか申し込みが得られない状況であり、E-mailや掲示板以外にも教職課程科目の授業前や教職ガイダンス等での周知も学生スタッフは行っている。それでも学生の参加は芳しいとは言えない。学生が参加しやすいよう、学生スタッフも実施にあたっては、解散時間を早めたり、ボランティア活動以外の企画を含めるなど、単なるボランティア体験ツアーだけにならないような工夫も行っている。佐藤ら(2015)でも岡山大学におけるボランティア活動等への登録者数の減少に言及しているが、その減少と学生参加が少ないことは関係していることも考えられる。中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」(2015)では、円滑な入職のための取り組みとして、学校ボランティアの活用の有効性について指摘しており、今後、学生に対するスクールボランティア推進については、総合的に支援を展開していく必要がある。

Ⅲ 学生との協働によるスクールボランティア推進支援の成果と課題

本論では学生と大学教職員の協働によるスクールボランティア推進のための取り組みとして、スクールボランティアフェア、スクールボランティア活動事例集、スクールボランティアツアーの3つについて実施内容を報告し、その成果と課題を整理した。

学生と協働することにより、学生スタッフ制度の当初の目標である、「学生目線」での推進支援に取り組むことができ、また教職員だけでは成し遂げることができない発展的な取り組みまでも学生スタッフが実現させ、岡山大学のスクールボランティア推進に大きな貢献を果たしてくれた。

しかし課題も残る。先に述べたように、フェアへの参加人数減少や、ツアーの学生募集の難しさと同様に、新規学生スタッフの募集においても困難を極めている。来年度のスクールボランティアフェア2016の企画・実施のために学生スタッフの募集を募ったが、応募者は極少数であった。これまで学生スタッフが築き上げた学生目線での多様な取り組みを継続させていくことが、スクールボランティア推進において必要であることは確かである。そのためにも、一層の学生スタッフの募集に力を入れる必要がある。「学生スタッフ制度」については、ボランテ

ィア活動をするサークル等のように誤解をしている学生も多くいるようである。しっかりと本制度の趣旨を説明しながら学生募集に取り組んでいく必要がある。

また、学生スタッフ制度により、学生目線での支援が実現できた。一方で、限界も見えている。より多くの学生がスクールボランティアに取り組むためには、大学教員等、特に指導教員からの参加促進や活動参加への意義説明といった学生への直接的な働きかけが何より重要ということである。各種イベントに対しては、学生だけではなく、教職員への案内・周知も徹底し、可能であれば学生と共に参加を促すなど、スクールボランティアビューローとして教職員に理解を求めていくことも必要である。これにより、総合的なスクールボランティア推進支援が可能となり、より教育実践力の高い教員養成につなげることができるのではないかと考えている。

Ⅳ おわりに

スクールボランティアビューローはこれまで主として窓口機能を担ってきた。それは、ボランティアを希望する学生の登録や説明会といった「学生からのアクションに期待する受動的な業務」であったと反省すべきである。しかし、学生スタッフ制度の導入により、スクールボランティア活動に学生スタッフをはじめ多くの学生を巻き込み、その重要性を説き、さらに学生と活動先をマッチングするという、「学生に対するアクションを行う能動的な業務」形態へと転換を図ったと自負している。

まだ本制度導入後2年しか経過していないが、これほどの成果を出すことができたのは学生スタッフ一人一人のおかげである。課題も多く山積しているが、こうした取り組みを継続していくことで、今後の大学におけるスクールボランティア推進およびその支援のあり方のモデルとなりえるのではないかと考えており、学生に対する様々なアクションを展開していきたい。

参考・引用資料・文献

- 佐藤大介, 山根文男, 江木英二, 曾田佳代子, 近藤弘行, 後藤大輔. (2015). スクールボランティアへの学生による主体的参加を促す新たな取り組みと考察. 岡山大学教師教育開発センター紀要, (5), 1-8
- 岡山大学地域総合研究センターホームページ. (2016)

年1月4日アクセス) . 学都チャレンジ.
<https://agora.okayama-u.ac.jp/challenge/>
中央教育審議会答申. (2015年12月21日) . これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申) .

注釈

- ※1 「岡山大学スクールボランティアフェア2015」は, 公益財団法人福武教育文化振興財団の平成27年度教育研究助成を受けて実施した。
- ※2 佐藤大介, 山根文男, 江木英二, 曾田佳代子, 近藤弘行, 後藤大輔, 佐々木雅徳, 福原香織. (2015年10月10日) . 岡山大学スクールボランティアフェアの成果と課題. 平成27年度日本教育大学協会研究集会における研究発表内容の一部を含む。

謝辞

スクールボランティアビューロー学生スタッフとして本事業の重要性を深く理解し, 熱心にご尽力・ご活躍いただいた森分志学さん, 竹内裕也さん, 橋本知奈さん, 横田香菜さん, 木野達也さん, 本覚洋介さん, 三野雄大さん, 西川碧さん, 森本恵理さん, アブアルオラムハンマドアミンエムさん, 大宇根千宏さん, 木口明紀さん, 徳永穂波さん, 河原真名美さん, 岩田奈那子さん, 小野翔平さん, 盆子原千智さん, 山田真央さん, 吉村衿香さんの各氏に, また本制度を事務として支えてくださった佐々木雅徳さん, 福原香織さん両氏にも, この場を借りて, 深く敬意を表すると共に厚く御礼を申し上げます。

A Practical Study on School Volunteer Promotion Supports in cooperation with Student Staffs

Daisuke SATOH^{*1}, Fumio YAMANE^{*2}, Eiji EGI^{*2}, Kayoko SODA^{*2}, Hiroyuki KONDOH^{*2}, Daisuke GOTOH^{*2}

Student Staff Service has been provided in School Volunteer Bureau for 2 years since October, 2013. Students Staffs and University Staffs have given supports for school volunteer promotion in student's perspectives; holding school volunteer fairs, writing, editing and publishing cases of school volunteer activities and distribution to the boards of education, and making school volunteer tours. Student Staffs elaborated each project from a student's view, and did their very best from planning/preparation to implementation/review. These projects must be very effective for students who will join school volunteer activities or students who cannot take a step doing volunteer. However, there are still issues; reduction of student's participation, difficulty of publicity, or shortage of student staffs. Also, University teachers should understand an importance of their encouragement to students about school volunteer.

Keywords : Student Staff Service, School Volunteer Fair, Cases of School Volunteer Activities, School Volunteer Tour

- ※1 Academic and General Okayama University Regional Research Association, Okayama University
- ※2 Center for Teacher Education and Development, Okayama University.